

# 外塚遺跡

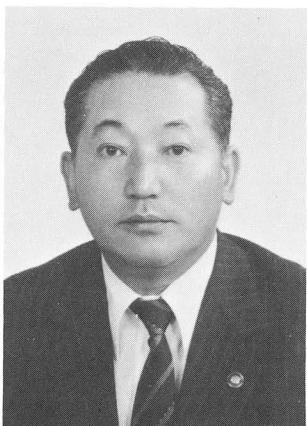


下館市教育委員会

## 発刊によせて

下館市長

濱野 正



下館市は、ほぼ関東平野の中央に位置し、栃木県二宮町を起点として南に延びる舌状台地の突端にあります。この地方は、河川の流域地帯と台地の交錯する地点で古くからひらけ、鬼怒川をはじめ、小貝、五行、大谷の各河川台地には縄文、弥生の遺跡をはじめ数多くの出土品がみられます。

特に鬼怒川左岸台地地方地域一帯は縄文から弥生文化に至る考古学上的一大宝庫で、考古学界の注目の遺跡となり「女方式」と名づけられたほど有名な遺跡でもあります。

しかしながら最近の急激にすすむ各種の開発に伴い、なかには未調査のまま破壊されてゆく貴重な遺跡が数多くあると聞いております。遺跡は私達の祖先の生活や文化の正しい理解のために欠くことのできない貴重な遺産であり、将来の文化創造の基礎をなす重要なもので、かけがえのない国民的財産ということができます。このため、現存する遺跡を保護し、保存し、活用をはかることはもちろん、これを正しく後世に伝えることは私達の重大な責務であると思います。

このたび発掘調査の行われた「外塚遺跡」は、神明地区土地区画整理事業の工事中発見されたもので、未確認の遺跡でありましたので遺跡の実態をつかむべく、緊急調査を実施して記録の保存を図り、外塚遺跡報告書を発行した次第であります。しかしながら先般発行した報告書は非常に頁数も多くしかも専門性の高いものですので、この度市民の皆様に広くご理解をいただくために外塚遺跡報告書ダイジェスト版を発行することとなりました。

このダイジェスト版によって、なお一層理解されると同時に地域の豊かな歴史的、自然的環境をまもるために十分活用されることをご期待申し上げます。

## はじめに

下館市教育委員会は、昭和56年8月に外塚遺跡の発掘調査を実施し、昭和60年3月に発掘調査報告書「外塚遺跡」を刊行した。長岡芳、川崎純徳、鈴木加津子、宮内良隆、大西智文、高橋伸子、今橋浩一等の研究者によって編まれた報告書は、記録保存を目的としたもので専門性の高いものであった。そのため、下館市民が外塚遺跡並びに縄文文化を理解するにはいささか難しいと判断した下館市教育委員会は、市民が外塚遺跡をもとに縄文文化を理解するための縮刷版を作成することにした。外塚遺跡の遺物写真を掲載して興味をそそるだけではなく、今までの研究の成果を活用して外塚遺跡をとりまく縄文文化を理解できるようにしたのが本書である。外塚遺跡では出土していない遺物を数多く掲載したのは外塚遺跡の縄文人の生活をより明らかにするためである。本書の作成を依頼された今橋は、報告書を作成した長岡、川崎、鈴木、宮内、大西、高橋氏等の研究成果を活かし、本書を編集した。

## 目次

発刊によせて	下館市長 濱 野 正	1
はじめに.....		2
1 外塚遺跡の発見者.....		3
2 外塚遺跡発掘調査の経緯.....		4
3 下館市の古地形の復原.....		5
4 世界史の中の縄文文化.....		6
5 時間を計るものさし.....		7
6 縄文の村.....		8
7 外塚遺跡の縄文土器.....		10
8 縄文人の食生活.....		13
9 縄文人の精神生活.....		18
おわりに.....		22

## 1. 外塚遺跡の発見者



外塚遺跡を語る上で欠かせないのがいる。下館在住の研究者長岡芳氏である。

長岡氏が外塚遺跡を発見したのは、昭和55年7月のことである。翌56年8月の外塚遺跡の発掘調査から報告書の刊行まで中核的役割を果たしていた。

長岡氏が考古学研究に足を踏み入れたのは、旧石器時代から縄文時代開始期にかけての研究者谷島静訓氏との出会いからだと聞いている。長岡氏は、茨城県西部から栃木県東部の山野を踏査し、旧石器時代の研究を進めた。日本には、旧石器時代に人間はいなかったという学界の通説をくつがえした群馬県岩宿遺跡の発見者相沢忠洋氏や日本旧石器時代研究の先駆的役割を果たすとともに現在も第一人者である芹沢長介氏等と交流をもちながら独自の旧石器文化論を構築していた。

縄文時代の研究に入ったのは、茨城県史編さん事業の協力者となった昭和46年頃からである。資料収集のために下館市を訪れた茨城県史専門委員佐藤達夫氏、川上博義氏、川崎純徳氏等の勧めにより、茨城県西部をフィールドとして縄文文化の研究を開始した。その後、佐藤氏と通信を交わす中で、旧石器文化、無土器文化、縄文文化の基本的な考え方を学び研究を深めていった。佐藤氏が急逝された後は、鈴木正博・加津子夫妻から縄文時代後期後葉の土器の分析を進め、曾谷式から安行1式の土器研究では県内有数の研究者となっていた。長い間蓄積してきた研究の成果を発表し始めたのは近年のことである。「茨城県西部における中妻系列微隆帶文土器の類例」『取手と先史文化（下巻）』（1976）「茨城県西地方における安行1式の分析一下館市大塚遺跡(1)の資料一」『常総台地12』（1981）この2編は、長岡氏の土器研究に対する謙虚な姿勢を見てくれる。長岡氏の縄文文化研究の深さの一端をうかがわせるのが『真壁町史料、考古資料編Ⅱ』（1982）である。土器研究の造詣の深さはもちろん縄文文化を厳しく見つめる洞察力をうかがうことができる。

外塚遺跡が下館の歴史の中に位置付けられるようになった第一の功労者は長岡芳氏である。昭和59年、その年は記録的な猛暑が続いた。長岡氏は外塚遺跡の原稿を執筆する中倒れた。薄れる意識の中で原稿のことを気にしつつ永遠の眠りにつかれた。

長岡芳氏が収集した旧石器時代から縄文時代の遺物の大部分は、春子夫人により下館市教育委員会に寄贈された。下館市に博物館あるいは資料館ができれば、市民の前に公開されるであろう。

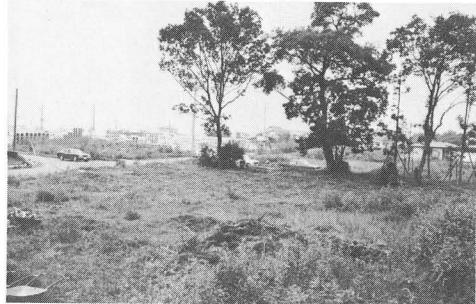
## 2. 外塚遺跡発掘調査の経緯

**遺跡の発見と対策** 下館市は昭和53年から10年計画で都市計画事業を進めている。昭和55年7月外塚羽黒神社付近で、下水溝の工事中廃土や溝の断面に縄文時代の遺物を発見したのは、下館市に住み真壁町史の編さん委員だった長岡芳氏である。その際長岡氏は縄文時代前期から晩期までの土器、石器、食物質食料の残滓などを採集している。

長岡氏は外塚地内に遺跡のあることを市教育委員会に通報するとともに、県内の研究者の下館来訪を要請した。茨城県史編さん原始古代史専門委員の川上博義氏、川崎純徳氏等は、長岡氏と共に現地を訪れ、採集された遺物や遺跡の現況から遺跡ができるだけ保存することが望ましいと判断した。この旨を教育委員会に伝え協議した結果、遺跡の状態がまだ把えられてないので、遺物の分布調査をしたうえで再検討することになった。

教育委員会では分布調査を宮内良隆氏に依頼した。宮内氏は外塚地内の広域にわたって綿密な分布調査を展開した。調査データをもとに教育委員会、長岡、川上、川崎、宮内氏等は、発掘調査を決定した。

**発掘調査** 遺跡の大部分は盛土によって保存されるが、遊具等を設置するためいっそう破壊の進む恐れがある、道路や下水溝の工事で破壊されているものの遺跡の実態はつかめていない等の理由で、昭和56年8月9日から8月26日にかけてA(羽黒神社跡)、B(旧湿地)、C(水田跡)の3ヵ所発掘調査を実施した。外塚遺跡は長岡氏の精力的な奔走と下館市教育委員会の良心的行為により地域の歴史の中に名をとどめることができたのである。



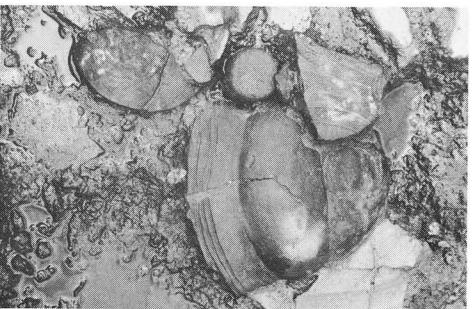
外塚羽黒神社跡（A区）



A区の土器の出土状態



B区の水没状態

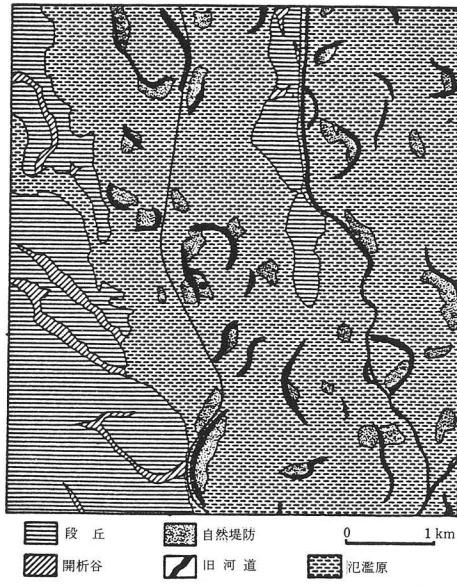


C区の土器の出土状態

### 3. 下館市の古地形の復原



外塚遺跡の位置と周辺の現地形



地形分類図（1985. 大西智文氏作成）

下館市の地形は、台地と低地に分類することができる。台地は1万年以前までの洪積世に形成された。数度の氷河時代を経て、日本列島の火山活動が活発な時期に堆積したロームをのせている。下館市街をのせる台地と鬼怒川東岸の台地では、市街の台地の方が古い。地質学的には、下館市街の台地は24万年前頃、鬼怒川東岸の台地は5万年前頃から形成され始めた。洪積世の頃今の低地は、地球が寒冷化すれば陸地(谷)となり、温暖化すれば海底になっていた。地形変動がある程度落ち着き沖積世に入ってから2つの台地の谷間は鬼怒川、大谷川、市街の東側は、五行川、小貝川により土砂が堆積して現在の地形にだんだん近付いたのである。土砂の堆積化が進む中で、台風や大雨のたび河川は流路を変えた。時には大量の土砂をところどころに積み重ねた。それが下館の低地に点在する微高地（自然堤防）である。下館市の地名には、「塚」、「島」とつくところが多い。周辺より幾分か高い所に付けられており、自然堤防と考えてよさそうである。「沼」、「泉」などが用いられるのは湧水地か湿地である。「田」のつく地名は、低湿地を開墾して水田化したことである。外塚遺跡をのせる自然堤防について大西智文氏は

- (1) 大谷川の形成する沖積面（堆積作用によってつくられた土地）に立地する。
  - (2) 縄文時代中期頃形成され、以後大きな変化を受けず現在に至っている。変化の少ない原因是、大谷川が小河川であるとともに上流に大きな土砂供給地をもたない。
- とまとめている。

#### 4. 世界史の中の縄文文化

#### 日本の先史文化と世界の文化

**新石器文化** 日本列島に人類が渡ってきたのは氷河時代、20万～13万年前のリス氷期と呼ばれる時期と見られている。日本旧石器文化の開始である。右の表で世界に比べて日本の新石器文化（縄文文化）の開始が早いのは、土器の製作年代が古く見られているからである。ただし、大陸でもっと古い土器が発見される可能性があり、改める余地がある。

**縄文農耕** 新石器文化の特徴は、農耕、磨製石器、土器、織物などである。縄文時代は主食を得るための農耕が認められていないので特殊な新石器文化といわれている。縄文

日本 の 文 化		年 代 (B.C.)	世 界 の 文 化	
旧石器時代	大陸から日本へ人類の移動 (北方、南方の2方向より) ナウマンゾウ オオツノシカ	200万年前 300,000 150,000 30,000	旧石器時代	アウストラロピテクス 北京原人 ネアンデルタル人 (剝片技術) クロマニヨン人 (石刃技術) 西アジアに農耕の起源 (各地に伝播する)
縄文時代	土器の出現 狩猟・採集・漁撈活動 竪穴式住居(定住集落)	10,000 5,000	新石器時代の開始	
	縄文式土器 土器・石器・木器・骨角器 原始的信仰 土偶・石棒 埋葬 拔歯 製塙活動	3,000 2,500 1,500	メトポタミア文明 エジプト文明 インダス文明 黄河文明 エーゲ文明 佛教(シャカ)・儒教(孔子) ヘレニズム文化	金属器製作
弥生時代	稻作農耕開始 金属器の伝播 小国家分立(首長制国家) 漢倭奴国王印 邪馬台国	300 300 0 A.D. 300	秦・始皇帝 万里の長城 前漢 キリスト教 ローマ帝国最盛期	

農耕についてはいろいろな説がある。周囲を海に囲まれ気候も温暖で照葉樹林、広葉樹林が繁茂していたので魚貝類や植物質食料を豊富に得ることができたので農耕はなかったという説、中部山岳地帯で縄文時代中期に縦長の打製石斧が大量に出土することからこの石斧を土掘り用の鍬と考えた農耕論、弥生時代の高度な稻作農耕を摂取できる程度の原始的農耕を認める説もある。最近の調査では、福井県鳥浜貝塚（縄文時代前期B.C. 4000年）で、ヒヨウタンやリョクトウの種子が発見されており、栽培活動が始まっていたことがほぼ確定的になった。ただし、主食となる米や麦などを得るための農耕段階に至っていない。北九州では縄文時代晩期の層から米が発見され、弥生時代直前に稻作農耕が渡来したと考えられるようになった。

社会構造、政治史的な面から見ると縄文時代1万年間の変化は、世界に比べると遅々としたものである。当時のオリエント地域では、B.C. 3000年頃には都市が成立し王朝による人民支配の時代に入っている。奴隸制の強化が農耕をいっそう発展させていったのである。弥生時代は大陸文化の影響下に成立し、古墳時代は積極的に大陸文明に隸属化しようとした時代であったのに対し、縄文時代は列島独特の文化を維持していたのである。

## 5. 時間を計るものさし

縄文時代はもちろん弥生、古墳時代以降も日本人の使う道具で刻々変化し続けてきたのは素焼きの土器である。

**型式** 土器には器形と文様がある。器形は用途を表し、文様は基本的な文様（貝殻でつけた文様、棒で引いた凹線、粘土のひもの貼り付け、木籠による彫刻など）の組合せによって構成されている。器形と文様は、ある特定の時間、ある特定の地域だけで採用されている。そこで、特定の時間と地域の分かる土器を○○式と称している。これが型式である。土器の型式は、その土器が発見され型式設定された遺跡名をとつてつけられる。外塚遺跡で最初に隆盛した時代の土器である堀之内1式は、千葉県市川市堀之内貝塚で発見された土器の中でも古いタイプの土器ということを表している。(1、2、a、b、cは時間的に後者ほど新しいことを表したものである。)

**編年** 型式の前後関係を層位関係（地表に近い地層の遺物ほど新しく、深い地層の遺物ほど古いという原則）に基づいて、組み立てたのが編年である。旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡の古さは層位関係によって決定されている。

**絶対年代** 歴史書により年代が明らかになる事象は別として遺物や遺跡が今から何年位前かという確実な年代を決定することは難しい。近年は物理的な方法によってそれが試みられている。生物体に含まれる放射性炭素<sup>14</sup>Cが5560年に半分は崩壊するので、減少した割合をもとに絶対年代を求める方法が考古学ではよく利用されている。

縄文式土器編年表

時 期	型 式			年 代	
	南関東係	茨 城	東北南部系	C <sup>14</sup>	山内・佐藤
	原縄文系土器群				B.C 2500
早 期	前 葉	井 大 夏 稻	草 丸 島 荷	B.C B.C 7298±500 (夏無)	
	中 葉	田戸下層 田戸上層	花輪台2 三 戸(押型文伴出) 田戸下層 田戸上層	6451±350 (黄島)	
	後 葉	子母口 野 島 鶴ヶ島台 茅山下層 茅山上層		5550±150 (狭間)	
前 期	前 葉	花積下層 二 ッ 木 閑 植 黒 浜	山 房 房 大木 2a 大木 2b	3730±145 (植房)	B.C 2000
	後 葉	諸磯 a1 諸磯 b1 諸磯 b2 諸磯 b3 諸磯 c 十三菩提	浮島0 浮島1 浮島2 浮島3 興津 三反田	大木 3 大木 4 大木 5 大木 6	3158±400 (加茂)
	中 葉	五領ヶ台 阿玉台1 阿玉台2	下小野	大木 7a 大木 7b	
中 期	中 葉	阿玉台3・4 加曾利E 1 加曾利E 2		大木 8a	2720±150 (三郎作)
	後 葉	加曾利E 3 加曾利E 4		大木 9古 大木 9新	2571±300 (姥山)
	後 葉	称名寺 堀之内1 堀之内2			
後 期	中 葉	加曾利B 1 加曾利B 2 加曾利B 3			
	後 葉	曾谷 安行1 安行2(宮)系土器群流入			
	中 葉				1130±180 (検見川)
晚 期	前 葉	安行3a 安行3b 安行3c	大洞B 大洞B C 前浦	1750±150 (堀之内)	B.C 1000
	後 葉	杉田2 千綱 荒海	大洞A 大洞A	648±150 (西志賀)	
	後 葉		大洞C 2	400±120 (荒海)	

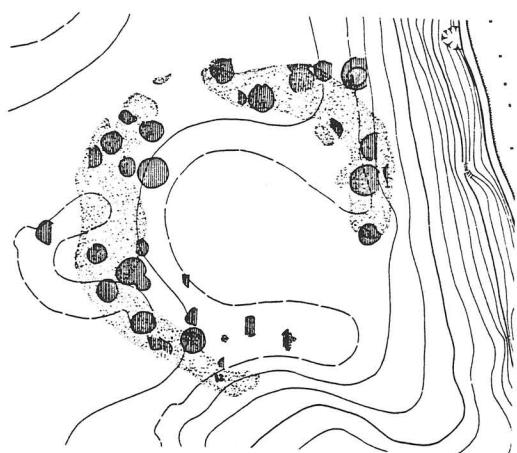
(1973 川崎純徳作成 一部加修正)

## 6. 縄文の村

縄文人の生活の中心舞台は集落である。集落全体を調査すると、住居の構造、集落の形態、使っていた道具、身につけていた装飾品、食料の生産、消費活動、祭祀、葬制、呪術、人口、他地域との関係など多方面にわたって生活を再現することができる。近年、大規模な開発に伴う発掘調査で、集落全体を調査する例が増加してきたので、縄文社会を復原する研究が急速に進められている。

**集落の形** 縄文時代前期頃から大集落が形成されるようになる。特に大集落が増加するのは縄文時代中期である。千葉県船橋市高根木戸貝塚では1遺跡で75軒、松戸市貝の花貝塚では35軒確認されている。同時期に弧状に並んだ10軒前後の住居が使用され、時間を経て環状になったものである。茨城県で調査されている縄文時代の大集落は86軒の住居跡からなる桜村下広岡遺跡である。貝の花や高根木戸のようにはならないが、円弧状の配列の重複が認められる。外塚の集落は全く調査されていないが、自然堤防の縁辺部に規則性をもって形成されていたのだろう。集落の形は、基本的に自然地形に制限されるものの集団としての規制が強まると一定の規則性の中で形成されていったようである。

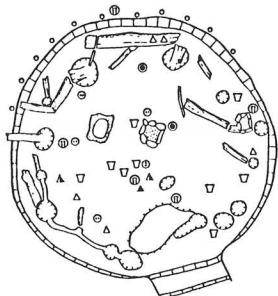
**集落の構成要素** 集落は先史古代人の生活の基盤である。国内で年間に調査される遺跡数は多いものの、集落の一部だけを調査しているのが普通である。そのため社会全体の復原が難しい。集落遺跡のメインとなるものは住居跡である。住居の形や使っていた道具が分かる。また不慮の死をとげたと思われる住居跡の数体の人骨から居住人数を想定することもできる。遺物の位置から空間の利用方法も考察できる。



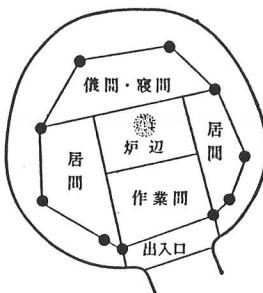
千葉県松戸市貝の花貝塚の集落



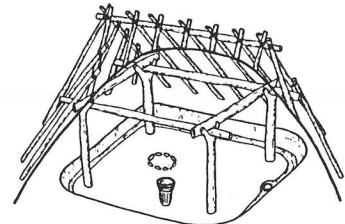
外塚遺跡出土の石斧(土堀り・伐採用)



□土器 ◎埋復 ⑪石皿 ◎四石  
▲磨石斧 △打石斧 ▲石燃



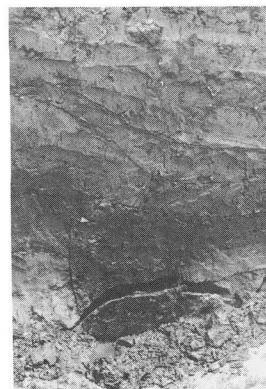
縄文時代の居住空間



集落は共同体であるが、空間には共用した場所と私的な場所があったようである。集落の中央部や周辺、堅果類の採集場、狩猟場は共用的空間であり、住居の内部、周辺は私的空间である。住居の使い方には平面的な利用法と立体的な利用法がある。平面的には出入口、炉辺、作業空間、居間兼寝間空間、祭儀的空間などがある。立体的には、住居の床面つまり日常生活空間、地面と葺下した屋根の間にできた空間、(整理棚)住居の骨組みや屋根の内側からぶら下げる空間(獣肉、魚肉のくんせい、堅果植物類の乾燥粉)などが考えられる。住居跡の周辺に発見されるのが地面を円形あるいは長円形に掘った土壙(どこう)である。形態の様々であり、機能用途も多岐にわたるようである。縄文時代前期には、平面が円形で断面がバケツや洗面器状の土壙が多いが、中期以降は断面形が多様化する。今までに明らかになっている土壙の機能は、植物質食料の保存や貯蔵、死者を埋葬する墓穴、粘土採掘壙、ゴミ捨て穴などである。ゴミ捨て穴と考える理由は、獣骨や魚骨は放っておけば悪臭をはなちハエなどが寄ってくるがこれは縄文人にとっても不愉快だったはずで、土壙の中に骨片類や貝殻が埋没している例があるからである。掘り上げたロームは土器作りの原料となったのであろう。外塚遺跡の土壙からは獣骨片、魚骨片、鹿角片、クルミの殻やトチの実などが検出されており、ゴミ捨て穴に用いられたようである。ただし、貴重品である碧玉製小玉も含まれていた点が気にかかる。ゴミ捨て場の代表的なものが、貝塚や破損土器の廃棄場である。住居址の他に、土器の焼成跡、祭儀場と思われる施設、貯蔵庫跡と思われる遺構の発見される場合もある。縄文社会を復原する根本的な遺跡は集落である。下館市にも大規模、小規模の集落が土中に眠っている。下館付近の縄文人の生活を復原するためには慎重な調査が望まれる。



貝塚の貝の堆積状態



C区の土壙断面図

## 7. 外塚遺跡出土の縄文式土器

**縄文時代の容器** 粘土で形をつくり素焼きにした土器、木をくりぬいて作った木器、ヒヨウタン、草木のつるや竹、割り木で編んだカゴやザル、ザルや木器に漆を塗ったもの、動物の皮や頭蓋骨の容器などが縄文時代に使われていた。化学変化で固くなった土器以外の容器は、腐食してしまい特殊な環境でなければ残存することはない。

**土器の用途** 実用的な面からみると貯蔵・保管と煮焚である。果実や粉などの貯蔵、水の保存、赤色顔料やアスファルトの貯蔵や運搬、貴重品（貝輪や玉類）の保管、これらが転用されて棺としての役割ももたされている。縄文時代に使用された容器のうち耐火性があるのは土器だけである。土器には火を受けて脆くなったものや炭化物が容器の内側に付着したものがある。煮焚きに用いる時は、外側から直接火を受ける場合と焼けた小石を土器に入れ煮沸する場合と2通り考えられている。土器の形=器形は、古くは鉢あるいは深鉢という程度であったが後期中葉、後葉に器種が多様化し、用途に応じて器種が考えられている。後期・晚期には用途不明の非実用的な土器も登場する。

**土器の製作** 縄文土器は粘土紐の輪を積み重ねて形を作っているのが普通である。手で伸ばしながら形ができるがると表面を滑らかに仕上げる。器面全体に縄を回転させて付けた縄文も器面調整の一方法である。器面を整えた後は文様を描く。文様を描く道具には、貝殻、シノダケやこれを半分に割いた半截竹管、木製のヘラやハリ状のものなどがある。縄文も回転する紐の原体や回転方向によって装飾効果をあげることができる。

**前期の土器** 出土量は少なく10点に満たない。粘土に植物質纖維を混入した関山式、黒浜式土器、東部関東に分布する貝殻で文様を付けた浮島式土器などが出土した。

**中期の土器** いずれも破片で出土しているが、量が比較的多く外塚遺跡に縄文人が住み始めた頃と考えられている。中期末葉の加曽利E3式、E4式土器が出土している。

**後期前葉の土器** 後期初頭の称名寺1式、2式土器は出土量は多いものの完形になる土器はない。今回の調査で文化層（ある特定の時期の遺物が豊富に包含され、その時期の文化



縄文時代後期初頭堀之内1式土器

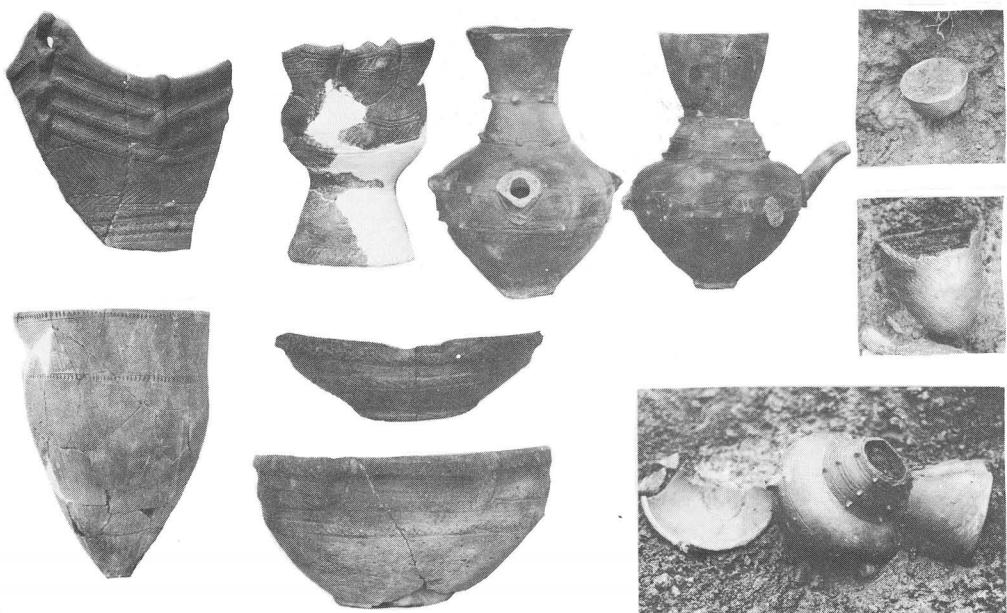
のようすがわかる土層や貝層）が確認できたのは堀之内1式の段階からである。器形はほとんどが深鉢形土器であるが、注口土器や壺形土器や土製のふたも出土している。

**後期中葉の土器** 加曾利B1式からB3式まで豊富な資料を得ることができた。器面を丁寧に研磨し精巧な文様を描いた精製土器と縄文や沈線で単純な文様を付けられた粗製土器の差が顕著になった時期である。



縄文時代後期中葉・加曾利B1式土器

**後期後葉の土器** 曾谷式から安行2式まで連続した型式が認められる。外塚遺跡の縄文人の活動が最も活発だったのは安行1式の時期である。埼玉県など関東内陸部に分布する高井東式土器、東北地方一帯に分布する器面に粘土瘤をつけた土器（新地式、金剛寺式、西ノ浜式、宮戸Ⅲ式などの型式名が付けられている。）などが出土しており、遠隔地の人々との交流をうかがうことができる。



縄文時代後期後葉、安行1式、高井東式、新地式土器



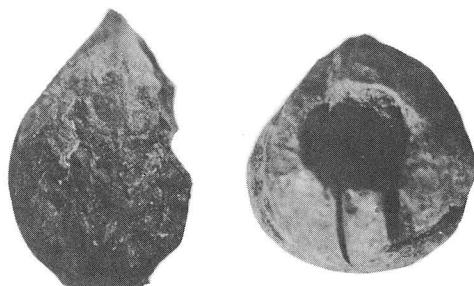
縄文時代晚期 安行系・寺脇系・大洞系土器

**晩期の土器** 縄文時代の最後の時期である晩期は、土器の製作においても成熟し文様には東北地方の影響を受け、彫刻的な文様が多用されるようになる。晩期の土器は、後期に比べると分布する範囲が狭くなる。しかし、周辺地域との交流もさかんで外塚遺跡で出土している晩期の型式名を羅列すると、関東系の安行3式、姥山式、前浦式、東北式の大洞式などがある。晩期初頭安行3a式の段階で大洞式の中でも福島県いわき地方に分布する寺脇系土器群が確認されている。外塚遺跡の縄文文化が終わる頃になると安行系の土器は姿を消し、大洞C2式の土器が用いられている。この現象は茨城、栃木両県の北部地方と同じ現象である。晩期の社会構造を解明する重要な手がかりである。

## 8. 縄文人の食生活

生命を維持するための最も大切な活動は、食料の確保である。動物性食料は貝塚の遺存体から植物質食料も泥炭遺跡や湿地の遺存体や土中の花粉分析によって判明しつつある。動物は移動したり飛んだり土中にもぐったりするために特殊な技術や道具が必要になる。植物は移動性に乏しいため採集しやすい。縄文人の食料の大半は植物に依存していたようである。

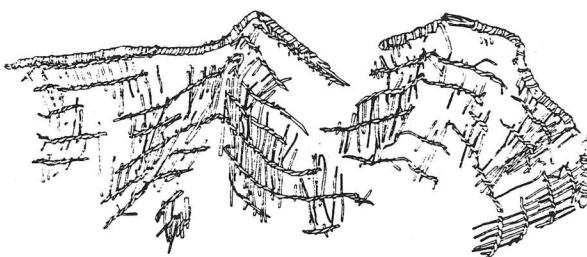
**縄文時代の植物質食料** クルミ、ドングリ類、クリ、トチが主なものである。外塚遺跡でもクルミ、クリ、トチが発見されている。クルミ、クリ、ドングリ類のうちのシイなどは、生食はもちろん煮ても焼いても食べられる。しかしドングリ類の多くやトチはアク抜きをしなければ食用には適さない。渡辺誠氏は、縄文時代中期以降埋設した土器と石組みで構築された大型炉が出現することから、灰によるアク抜き法を想定している。



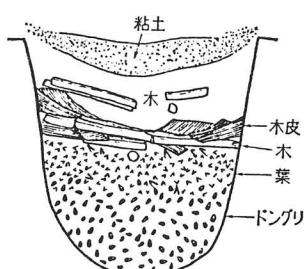
外塚遺跡出土のクルミ

いる。小山修三氏は民族学や民俗学の研究をもとに水さらし、煮沸、発酵の3種を考えている。野山で採集された堅果類は、つるやタケ、細く割いたヒノキなどで編まれたかご、ざるで居住地まで運ばれた。即食用に適するものは、乾燥、保存の方法がとられ、ドングリやトチなどはアク抜き処理された。

ドングリ類のアクは水溶性のタンニンなので、つぶして小川の水でさらされた。春から夏



縄文時代のカゴの断片



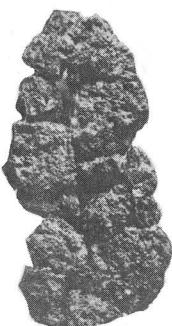
ドングリの貯蔵例

に食べる分は貯蔵用の土壙を掘って密閉された。このままでは長期間の保存は無理で、冬の終わりか春の初め発芽する前に掘り出したのであろう。サポニンやアイロンなど非水溶性のアクを含んでいるトチなどは、堅い皮を鼓いてむき、灰とあわせて土器で煮沸し、水でさらすという加工工程を経てやっと食用化されたのである。アク抜き技術は食用に不可能なものを可能にし、食料を増やす高度な技術なのである。アク抜きの過程で堅果類は粉末になるので、ど

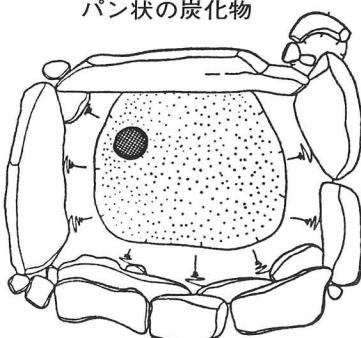
ろどろのかゆにして食べたのであろう。また、固く練つてダンゴ状にして乾燥させた保存食品も作られていた。そのまま食べることもできたが、炉端のおきや灰で焼いた方がうまいも増したことであろう。獣を追う男たちの携行食料としては最適である。

堅果類は固い皮殻により遺存する例が多い。今から10年前で39種類の植物質食料が確認されているが、これらは皮殻、種子が検出されたものである。形を残していない食料となる植物も採集していたと考えることができる。デンプン質食料は、ヤマイモ、クワイ、クズ、ワラビ、カタクリ、ユリ根、纖維質食料としては、アカザ、ウド、セリ、ゼンマイ、ワラビ、ヤマゴボウ、タケノコその他の青菜類、キノコ類、果実としてはヤマブドウ、ヤマナシ、ヤマスミ、グミ、ヤマモモなどがあげられよう。現在、食用可能とされている植物の大部分は縄文人が毒味、試食した結果である。

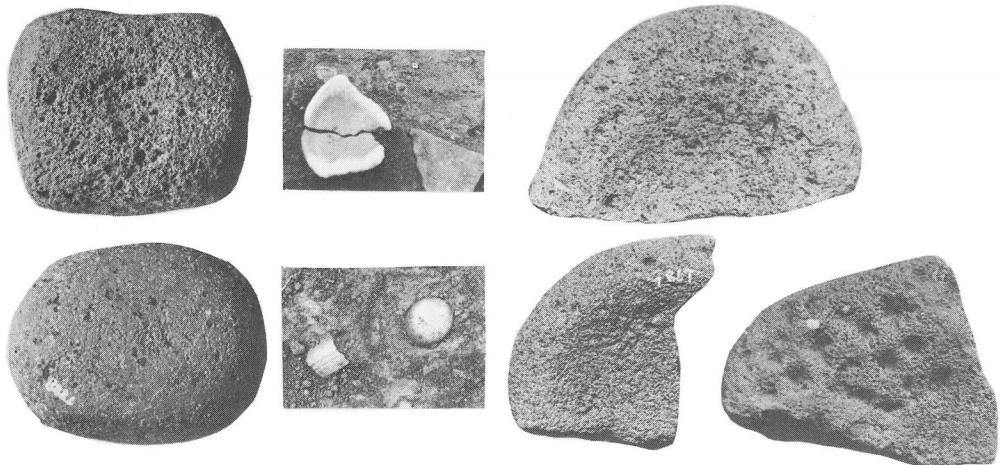
縄文時代は採集の時代といわれているが、栽培していた痕跡もある。栽培植物としてはヒヨウタン、ソバ、リョクトウ、ムギ、エゴマなどが出土している。縄文農耕については弥生時代に稻作農耕が普及発展する前提としての農耕論、短ざく形打製石斧の大量出土からの農耕論から最近では栽培植物からの農耕論が展開されている。人為的な働きかけがなければ育たない栽培植物だけでなく、集落の周辺部にクリ、クルミ、シイなどを植えてい



パン状の炭化物



炉内のパン状固体物



外塚遺跡出土の加工用石器

たことも想像することができる。

**植物質食料の加工工具** 堅果類の加工はまず殻を碎くことから始まる。粉にひくこともある。こうした作業の加工工具は石で作られていた。石の表面に穴がいくつもあけられているのが凹（くぼみ）石である。堅果類の殻を破り碎くにはそれなりのこつがあつたはずである。力任せにむやみに割る必要はない。規則的に並べて上から重みをかけるだけで中身がとり出せるようにきれいに割れるものである。この時、重みをかけるのに使われたのが敲（たたき）石である。敲石は殻を割ったり碎くのに使われた。粉碎された堅果類をより細かくするために用いられたのが磨（すり）石と石皿である。磨石と石皿で後世の臼の働きをしていったのである。また石皿は粉を練るときにも使われた。

**縄文人の漁撈活動** 日本人は漁業民族である。漁獲量、消費量とも世界有数である。日本人の魚好きは、縄文時代以来の伝統である。小山修三氏は、民俗学的データをもとに、縄文人が食していた獣類と魚類の比を1：6程度と推定している。捕獲する道具の種類や発達からみても漁撈活動の活発だったことがうかがえる。漁撈形態は、漁場によってA. 外海に面した地域での漁撈、B. 内湾沿岸での漁撈、C. 河川・沼沢地帯での漁撈に分類されている。日本で貝塚の数が多く、規模も大きく漁撈活動が盛んだったのは、東京湾沿岸、利根川、霞ヶ浦沿岸から三陸海岸にかけて東日本の太平洋側に面した地域である。

#### 外塚人の漁撈 外塚遺跡

でも漁撈具が出土しており、Cのタイプの漁撈が展開されていた。縄文時代外塚遺跡の周辺には旧大谷川が蛇行して流れ、三日月湖や湿地が形成されていた。そこでヤマトシジミ、オオタニシ、イシガイ、カラスガイ、

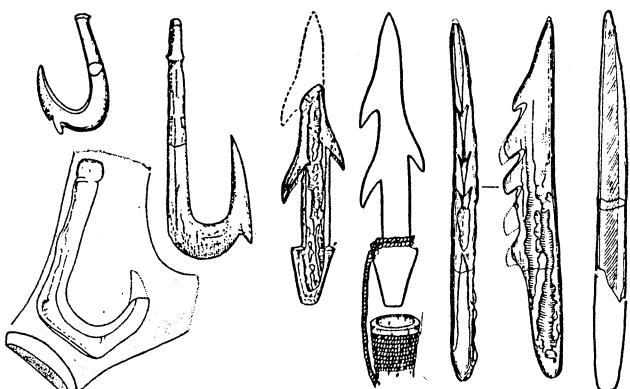


土錘

外塚遺跡出土

石錘

カワニナなどの淡水産貝類を採取し、コイ、フナ、ギギ、ウナギ、ナマズ、ドジョウ、ウグイ、ヤマベ、アユ、サケなどを捕食していたと思われる。外塚遺跡で出土している漁具は、網のおもりとして利用された土錘（どすい）や石錘（せきすい）である。沼沢地で網漁が漁撈の中心的な位置を占めていたのだろう。民俗例として残っている漁法のほとんどを縄文時代からの伝統に基づいたものと考えることもできる。例えば手づかみ漁、細い竹を徳利形に編み水底に沈めるウケ漁、笹や小枝を底に沈め小魚、カワエビを探る笹の葉漁、浅い川で底石をたたいて魚にショックを与えるガチンコ漁、簡易定置網漁などである。釣針、モリ、ヤスの類が外塚遺跡では出土していないが（おそらく腐蝕してしまったのだろう）



骨角製漁撈具

う）、いろいろな漁法に併行して用いられていたと考える方が妥当である。

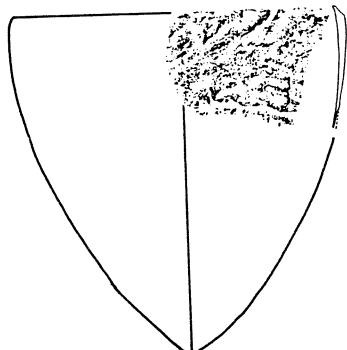
**内湾の漁撈** 大貝塚が形成されたのは鹹水が浸入していた入江や河口付近であった。縄文人の漁撈活動が最もさかんだった地域である。鹿角製のモリ、骨製ヤスなどによる刺突漁、土錘や土器片錘による網漁、鹿角製釣針による漁が発達し、骨角器

の製作される量、消費量とも多かった。内湾漁撈の発達は、漁法や舟の操縦法を発展させ、とくに外海でのモリ漁を発達させたのである。

	内湾で捕獲・採集された主なもの	外海で捕獲・採集された主なもの
貝類	ハマグリ、アサリ、カキ、ハイガイ シオフキ、オキシジミ、アカニシ、 ウミニナ、イボキサゴ、イボニシ、 スガイ	ベンケイガイ、ウチムラサキ、チョ ウセンハマグル、ダンベイキサゴ、 コタマガイ、オキアサリ、サザエ アワビ、イシダタミ
魚類	クロダイ、スズキ、ボラ、コチ、フ グ、アジ、ウナギ、ハゼ、イワシ、 サバ、	マダイ、マグロ、カツオ、ブリ、サ バ、アイナメ、アナゴ、アンコウ、 サメ類、サワラ、ホウボウ
他	軟体動物各種	クジラ、イルカ、アシカ、ウミガメ

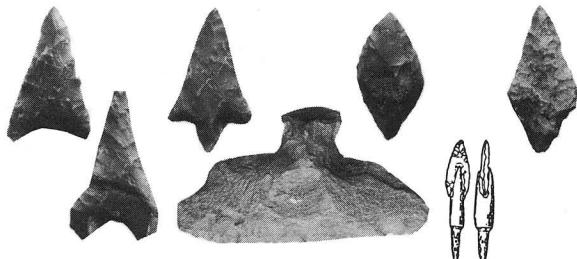
人類は旧石器時代から単独に生活していたわけではない。原始的ではあるが、家族や血族を中心とした生活、狭い地域でグループ化した共同生活などが考えられる。縄文時代は後者の段階であろう。植物の採集や狩猟はもちろん漁撈活動においても集団の生命を維持するために共同で作業をしていたようである。漁撈や狩猟には特殊な技術が必要であるから、活動する際にはリーダーとなる人物が現れていただろう。彼は漁や猟の季節、方法に指示を与え、集落の中でも一目置かれる存在だったにちがいない。

縄文時代後期後葉頃からは狩猟、漁撈、製塩などの生産活動における分業化の気配が感じられる。



外塚遺跡出土の製塩土器

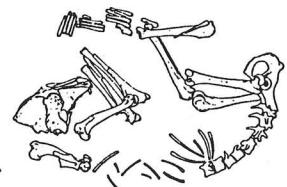
**縄文人の狩猟** 動物性食料の大部分は魚類だったと考えられているが、昆虫類、哺乳類、両性類、爬虫類も重要な食料資源だった。捕獲用の道具の代表的なものが堅い石で製作した石鏃（やじり）である。氷河期に棲息していたマンモス、ナウマンゾウ、ヘラジカなどの大型動物が気候の変動や乱獲によって減少、絶滅する中で捕獲する対象が敏捷な小型動物に変わった。捕獲する対象の転換が、狩猟具を石槍から弓・矢へと変化させたのである。



外塚遺跡出土の石鏃（やじり）と石匙（皮剥き）

外塚遺跡でも石鏃が7点出土している。獲物となったのは、シカやイノシシであった。貝塚から出土しているシカやイノシシはメスに比べオスが多い。また幼獣は少なく、意識的に埋葬されて発見されることがある。縄文の狩人達には、子を産み続けるメスや幼獣はあまり捕獲しないという約束があったようである。貝塚を調査するとイヌの埋葬例を発見することがある。当時イヌが狩猟犬として飼育され縄文人の良き伴侶だったことを物語っている。縄文人は動物に対して単に捕獲して食料にするだけではなく、動物の生や死を敏感に感じとり愛惜の情を持っていたのである。貝塚で出土した動物骨からは縄文人の合理的精神の一端をうかがうことができる。例えば、捕獲されたシカは解体され、肉を食べ骨を割って髓をする。鹿角は釣針、モリ、ヤスなどの漁撈具あるいは耳飾、ヘアーピンなどの装身具に加工され、長い骨からはヤスや針を作る。幅の広い肩甲骨などは土掘り具として用いる。皮は敷物にしたり、なめして衣類、袋、紐など利用される。捕獲した動物は生活を充たすために余すところなく利用されていた時代だったのである。縄文時代に限ってみると狩猟方法は漁撈の方法に比べると道具も少なく時代が新しくなるにつれ発達したとは言い難い。旧石器時代から伝統的な狩猟法は弓を用いた段階でほぼ完成し、縄文時代晩期に乱獲の極に達し、自然に育くまれた動物の捕獲は衰えて家畜化の時代へと向ったのである。日本で動物の家畜化が発展しなかったのは周囲を海に囲まれ漁業資源が豊富だからであろう。歴史的には仏教の影響も大きい。縄文時代の狩猟法としては弓猟の外に、落とし穴を含むワナによる狩猟もさかんだった。

外塚遺跡でも石鏃が7点出土している。獲物となったのは、シカやイノシシであった。貝塚から出土しているシカやイノシシはメスに比べオスが多い。また幼獣は少なく、意識的に埋葬されて発見されることがある。縄文の狩人達には、子を産み続



埋葬された犬



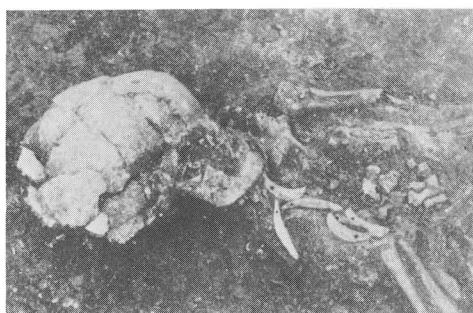
弓による狩猟

## 9. 縄文人の精神生活

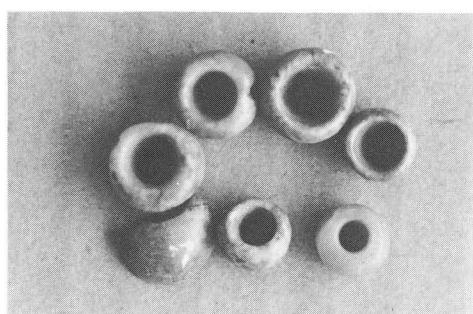
土器、石器などの製作、食料の獲得などを主な活動としていた縄文人達の精神生活はいかなるものであったろうか。考古学では、遺物やその出土状態、遺物や遺構の分布のようすから推測するしかない。より発展的に解釈するためには、民俗学や文化人類学の成果、文字に書かれた古代の習俗の例などを借用するしかない。『もの』の観察、分析、解釈は考古学の分野であるが「もの」の裏側に隠された実際の生活を復原することは難しい。

人間は人知ではどうにもならないできごとに遭遇した時未知の存在を意識する（存在を期待する）。これが『すがり』、『いのり』になり呪術、信仰、宗教へと通じる。その対象が何であったか、自然現象、けがや病気、出産や死亡、動物の増殖、植物の繁茂等原始的な立場で類推するしかない。

**護身用装身具** 医薬の進歩した現代でも死は最も恐しいことであり、病気やけがも悩みのたねである。未開社会では病気やけがに対応した薬草を求めるとともに未知の力を信じ祈るしかない。縄文人は、病気、けが、死をもらす悪霊から逃れ寄せつけないためにいろいろなものを身体（頭、顔、耳、首、胸、腕、腰、足首）につけていた。製作には、岩石、粘土、鹿角、歯牙、骨、貝、木などを利用した。



装身具を身に付けた埋葬人骨



外塚遺跡出土の首飾り

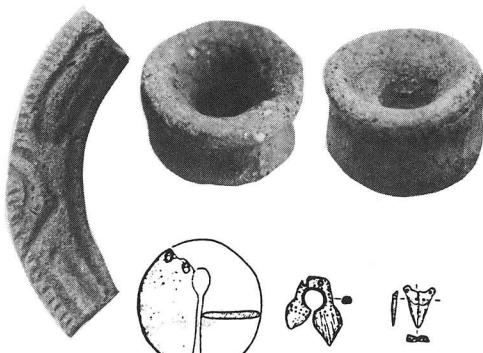
**髪飾** 縄文人の髪にはクシやヘアーピンがさされていた。イザナギとイザナミの神話に黄泉の国から逃げだしたイザナギがクシで身を守る場面がある。古代人がクシに靈力を託した証しである。

**顔面装飾** 土面（素焼きの人面）や土偶（素焼きの人形）を観察すると顔面に装飾を伴う例がある。魏志倭人伝には、倭人がいれずみや赤色顔料で身体を飾った習俗が記されている。古墳時代の人物埴輪の顔面に朱の塗られた例ある。未開社会の民俗例には、虫除のような実用的な例、祭礼や葬送、戦の時に身体に塗彩装飾する例がある。少年が大人になる儀礼の時に年長者の血を塗る場合もあるようだ。縄文時代には魔除的なものであり、弥生時代に継承され、古墳時代には葬送儀礼に転化していったと思われる。

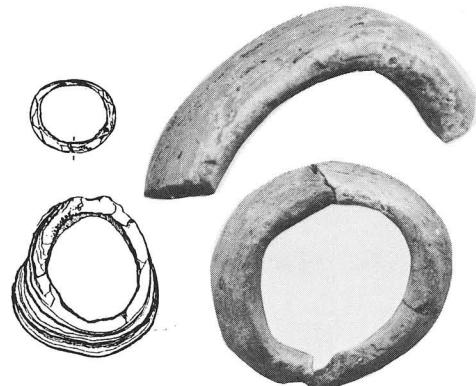
**耳飾** 形態からA耳たぶをはさむようにする、B耳たぶに穴をあけはめこむ、C耳たぶに穴をあけぶらさげる3種の装着法を想定できる。Aは玦状耳飾の初期的な装着法である。玦状耳飾には石製と土製がある。Bは土製の鼓形耳飾の装着法である。外塚遺跡では単純なものと線刻的なものが出土している。彫刻的で赤色塗彩された例もある。Cは歯、牙、骨などで作られた耳飾の装着法である。

**首飾（垂飾）** ネックレス状のものとペンドント状の2種がある。外塚遺跡ではネックレス状の小玉（緑色で硬いひすい）が出土している。ひすいの原産地は新潟地方であり、搬入された貴重品だった。安行1式期の所産である。ペンドント状のものには、石製の大珠やまが玉、クマやオオカミの歯牙、イモガイやタカラガイなどの貝製品がある。外塚の縄文人も歯牙、鹿角、骨、貝製のペンドントをぶらさげていたと思われるが腐食してしまい残っていない。

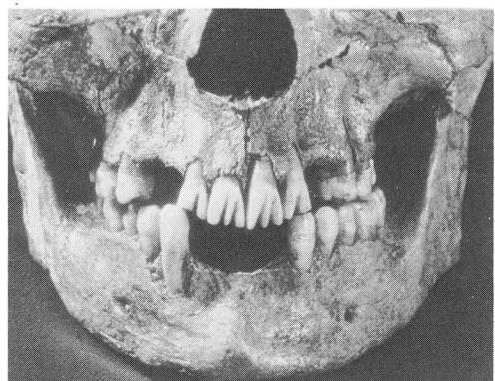
**腕輪** 外塚遺跡では土製の腕輪が出土している。文様のない環状のものと輪の外面に刺突と沈線を加えたものである。縄文時代の腕輪の多くは貝で作られている。ベンケイガイ、サルボウガイ、オオツタノハ、アカニシ、カキなどが原材料である。殻に大きい穴をあけて環状にしたものと半月状にして紐で結んだものがある。縄文時代後期初頭の時期に、貝輪が壺に保管されて発見された例があり貴重品であったことを教えてくれる。内陸部の遺跡で貝製品の発見されることはほとんどないが交易品として運ばれ、神秘的な乳白色は外塚縄文人に安心感を与えたことだろう。



耳 飾



貝輪と外塚遺跡出土の土製腕輪



縄文人の抜歯

**腰飾** 鹿角を利用して製作したものがほとんどである。鋭利な刃器で彫刻してあるのが普通で中には透彫的なものもある。人骨に伴って出土した例を分析すると、貝輪が女性骨に伴うのに対し、腰飾は男性骨に伴っている

**土版・岩版** 装身具も護符の一種であるが、土版や岩版はいかにもそれらしい。身に付けるには重すぎるので、穿孔されているものは住居の入口あたりにぶら下げ悪霊を寄せつけまいとしたのではないだろうか。外塚遺跡で出土したものは、渦状の曲線を組み合わせただけで、縄文は施されていない。土版や岩版は縄文時代晚期に盛行するが、外塚遺跡の例は晩期初頭に位置付けられる。

**縄文人の祭祀** 日本の伝統的年中行事は、稻作に付随した農耕儀礼を母胎としている。春に田の神を迎える豊作を祈ったり、収穫を感謝して田の神を送る祭がある。宮廷の神事でも重要なのは2月の祈年祭、11月の新嘗祭であり、天皇が人民の代表として神を祀ったのである。縄文人が外来文化である稻作を受け入れ、食料を得る方法を狩猟や採集から農耕に転換したのは、稻作に安定性を見出したからであろう。それだけに農耕儀礼が欠かせないものになつたのである。縄文の狩猟採集社会でもそれなりの信仰や祭祀のあったことは疑いない。自然現象の変異は、植物質食料の減産や動物の不獵、魚貝類の不漁をもたらした。余剰生産が少なく保存技術のない時代に食料獲得への執念は現代以上に強かつたと考えられる。祭祀は食料獲得ばかりでなく、人間の生死にかかる部分でも実施されていた。

**土偶・岩偶** 原形は旧石器時代から見ることができる。成熟した女性像を模したもので、豊かな乳房や大きく張った腰を強調している。土偶がさかんに製作されたのは縄文時代後期



土 版

茨城県福田貝塚出土

外塚遺跡出土



外塚遺跡出土の土偶 (胴下半部)

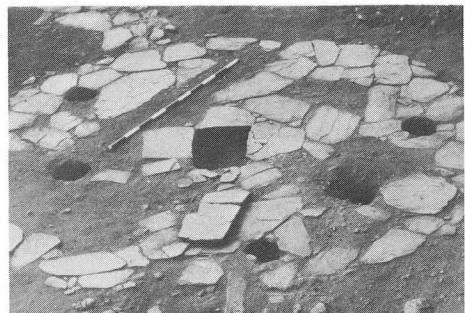
土 偶

岩 偶

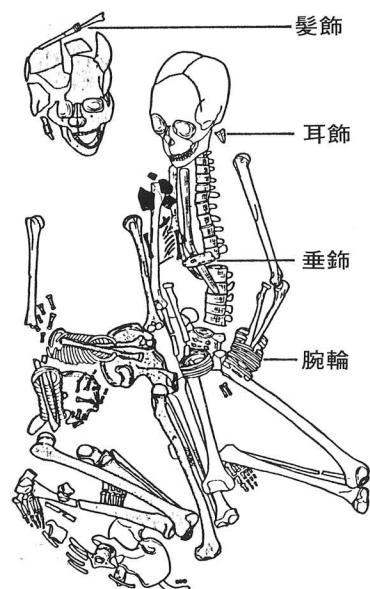
から晩期にかけてである。女性が妊娠し次の世代を産むことから、この能力を自然に転化して豊かな生産性を祈ったという説、母性崇拜、女神崇拜の象徴という説などがある。出産は医学の発達した現代だからこそ心配は少なくなったが、原始社会において出産は最も危険性の高い体験であった。現代日本人の平均寿命は80歳であるが、縄文人は30歳前後である。縄文人の死亡率の高い時期は、女性20~24歳、男性30~34歳くらいという統計があり、女性の出産適齢期における死亡率の高かったことを表している。土偶祭祀は集団的なものではなく、安産祈願、母体の安全、新生児の健康な誕生を祈るところから始まり、けがや病気の平癒を願うことに発展したとみられている。発見される土偶のほとんどが意識的破壊されている。患部を破壊して治癒や悪霊の退散を願ったと考えられている。

**特殊な遺物・遺構** 縄文時代後期、晩期と進むに従い実用的でない特異な形態の土器、土製品、石製品が登場し、赤色顔料を塗布した例が多くなる。遺構としては、配石遺構、敷石住居、環状列石などが構築される。気候の寒冷化による食料獲得活動の低下、乱獲等の将来的不安を解消するためという説がある。人類の精神的な発達は、呪術、信仰を発展させ原始的宗教へとつながってゆく。

**死者の鎮魂** 縄文人が死に対して厳粛な態度で臨んでいたことが埋葬人骨からうかがえる。縄文時代の埋葬例は、身体を折り曲げた屈葬と身体を伸ばしたままの伸展葬に大別される。埋葬された人骨には、頭部に甕をかぶせたものや胸部に石をのせたものがある。類例はあるものの数量的に決して多いものではなく特異な例である。自然死ではなく異様に苦しんだり事故死などの場合に靈魂がさまようのをおさえるための措置のように思われる。集落全体を調査すると墓域の設けられていたことがわかる。中には墓標を立てた例もある。新生児や幼児は甕の棺に納めて埋葬されている。食料となつたイノシシの幼獣や狩猟の伴侶となつたイヌも埋葬しており縄文人のやしさがしのばれる。装身具をつけたり、副葬品を伴う埋葬例は確認されているが、埋葬施設が作られた例は少ない。旧石器時代の墓の土壤を分析したら草花の花粉が大量に確認された例がある。縄文人も死者の鎮魂のために墓を飾り別れを惜しんだことであろう。



敷石住居跡



縄文時代の呪術師

## おわりに

下館市は茨城県西部随一文化的活動の盛んな土地柄である。優れた文化人を輩出し、先人の遺した文化財も豊富で歴史的にも古い町である。県西地域で地中に埋れた文化財（埋蔵文化財）は長岡芳氏の努力によって、特に縄文文化の解明が進み、埋蔵文化財行政も活発化してきた。

下館地方の丘陵や低地には未発見の遺跡が多数眠っている。自然堤防や水田下の遺跡では、動植物の遺存体や草、木製品が外気と遮断され腐食しないで縄文時代の生活を復原するうえで貴重な資料を提供してくれる。下館市にある低地遺跡を設備を整えて注意深く調査すれば、舟、弓、木製容器、クシなどの装飾品、植物質食料や動物性食料の残滓などが発見させる可能性が高い。

先史、古代の遺物や遺構は、道具や技術の発達、生活や社会構造の進歩・発展を知るうえで重要な役割を果たす。それらを深く追究することは、物や状態の珍品を見るような興味をこえて、人類の生き様や生きる知恵を知ることにつながるのである。

下館市でも規模の大小にかかわらず開発が進む中で必ずや遺跡に遭遇するはずである。発掘調査をすれば考古学的資料は増加するもの一種の破壊行為である。壊さなくとも済むのであれば保存処置を講じて後世の財産したいものである。保存が不可能な場合は、現代の発掘技術、科学技術を駆使した調査、熟慮した歴史的復原作業が不可決である。先人が私達現代人に遺した文化遺産を護り後世に伝えようとする一連の活動が、人心を豊かにし文化的福祉都市下館の建設の一助となることはいうまでもない。

最後に、本書の作成にあたり御助力下さった下館市教育委員会の飯野隆氏に深く感謝する次第である。(今橋浩一)

外塚遺跡——縄文時代の下館——

昭和61年3月31日 発行

編著 今橋浩一

発行 茨城県下館市田中丙 192の1  
下館市教育委員会

印刷 茨城県下館市春日町丙245  
中里印刷所